

ブラック・サッシュの自己認識と外部からの認識

— 認識と社会の関係 — (1)

上 窪 一 世

Self – perception of the Black Sash and perception from others :

the relation between perception and society (1)

KAMIKUBO Kazuyo

はじめに

本稿では、1955年の結成当時から80年代までを対象に主として英語系白人女性からなる反アパルトヘイト組織、ブラック・サッシュの自己認識とブラック・サッシュへの外部からの認識の変遷を追う。

ここでいう「自己認識」には2つの要素が含まれる。ひとつは、活動において表出し、意識される自分達の属性をどのように認識しているかということ。もうひとつは自分達の活動自体をどのように認識しているかということである。前者には「白人」、「女性」、「中産階級」といった人種、ジェンダー、階級の要素があげられよう。後者の活動とは具体的には活動内容、方向性といったことが相当する。

これらの認識は時代や社会状況との関連によっても形成、表出されるものであり、その意味でこれらは閉じられた個人の心理状態ではなく、常に外との相互作用で構築される開かれた関係である。そのためブラック・サッシュに対する「外部からの認識」は彼女達の自己認識にも影響を与え、彼女達の属性の再考、活動の内容や方向性にも影響していく要素である。

以下では結成の経緯を説明した後、時代背景に触れつつ、ブラック・サッシュ自身がどのような認識を持ち、あるいは持たれていたかを考察していく。考察時期としては結成直後から80年代までを対象とするが、80年代は、反アパルトヘイト運動自体が大衆運動化し、新たな時代に入ったとされる。その展開においてそれまで地域散在的で全国的な連帯のなかった各種団体間でネットワーキングが進んだ。そうした動きはブラック・サッシュも例外ではなく、様々な団体、組織とのネットワーキングが進み、新たな活動展開と自己、外部からの

認識がどのように関係しているかを考える上で興味深い時期である。また、筆者が旧体制崩壊直前のこの時期までを反アパルトヘイト運動のひとつの区切りと見ていることも関係している¹。

以上の設定をもとに分析を行い、認識と社会との相互作用、(拮抗) 関係を考察したい。

結成の経緯

1955年5月19日、ヨハネスブルク郊外の住宅で6人の「白人女性」達が、お茶会を催していた²。話題の中心は、当時政府が上程していた「上院法案 (Senate Bill)」についてであった。法案の内容は選挙方法を改訂し、上院議員の定数を増やすというものであったが、この改訂が当時認められていたカラードの投票権を奪うことに繋がるという懸念から社会的議論をよんでいた。そのからくりとは、カラードの投票権は1910年成立の南アフリカ連邦法に規定されており、この条項を改訂する場合は、上下両院議員の3分の2以上の賛成を必要とした。そのため上院に政府寄りの議員を増やすことで規定を満たそうとしたのである。ここで留意しておくべき点は、彼女達の怒りが、憲法を改訂しようという政府の謀略に対して発せられたものであり、必ずしもカラードの投票権剥奪に対する怒りからではなかった点である³。

ここで歴史的背景に触れておくと、アングロ・ボーア (南アフリカ) 戦争によりイギリスに敗れたアフリカーナーは、イギリスの存在を快く思わず、その為イギリス支配からの脱却と人種的平等の排除を悲願としていた。1948年にアフリカーナーの政党である国民党が初めて政権を掌握したことは、その悲願を実現に向けていく機会を握ったことになる⁴。イギリス主導で成立した南アフリカ連邦法を改訂することに繋がる上院法案は、言わば両者の確執の象徴的存在だったと捉えられよう。

このような状況でお茶会に集った6人は、「何かしなければ」という思いから6人がそれ

¹ 制度的には1994年の初の全人種参加の総選挙実施、その後の新憲法制定などが指標となろうが、本稿では1989年のボタ大統領からデ・クラーク大統領への交代以降の政治的動き、なかでも翌90年のマンデラ釈放、ANCなど主だった政治組織の合法化などの一連の出来事から反アパルトヘイト運動自体が一定の意義を持って終焉し、新たな段階に移行したと考える。

² 後にオリジナル・シックスと呼ばれた。ジーン・シンクレアー (Jean Sinclair), ルース・フォリー (Ruth Foley), エリザベス・マックラーレン (Elizabeth McLaren), ターシャ・パイバス (Tertia Pybus), ジーン・ボサーザ (Jean Bosazza), ヘレン・ニュートン・トンプソン (Helen Newton-Thompson) の6人。

³ 設立者の一人であり、長年代表を務めたジーン・シンクレアーは、「人種差別」に対して保守的な考えであったことを認めている。しかし、当時「人種差別」への反対を強く表明していたなら、逆にあれだけの女性達を動員できたか疑問であるという感想を述べてもいる。ミッチェルマンとのインタビューより (インタビュー年月日不明)。Michelman, Cherry (1975). *The Black Sash of South Africa: A Case Study in Liberalism*, London, New York, Cape Town: Oxford University Press, pp.35-6.

⁴ この時点ではまだ南アフリカ連邦であり、1961年に共和国へ移行してイギリスとの決別を表明した。

ぞれ知り合い6人ずつに電話をかけ、電話を受けた相手も同じように電話をかけるという方法で抗議行動への女性参加者を募った。彼女達は賛同者と共に「憲法擁護女性連盟 (Women's Defence of the Constitution League)」を結成し、当時ヨハネスブルク市長であったジョージ・ベケット (George Beckett) に集会を開くことを要請した。お茶会から僅か6日後の5月25日には、2500人も女性と共に市庁舎までデモを行った。このとき法案上程は憲法の死を意味するものであり、弔意を表するという皮肉を込めて黒いタスキ (ブラック・サッシュ) をかけた。これがマスコミの目にとまり彼女達を呼称する言葉として使用されるようになった⁵。

このデモから1週間後、更なる行動のために集会が召集された。そこでは2つの嘆願書を作成、提出することも決定された。1通はヤンセン (Jansen) 総督宛であり法案に署名をしないようにという内容だった。もう1通はストレイダム首相宛であり法案を撤回するか辞職を求めるという内容だった。この嘆願書は女性のための署名としたが、法案が国会で議論されるまでにはせいぜい2週間余りしかないという限られた時間のなかで10日余りの間に全国から10万人もの署名が集まった。そのうち「25000人分が地方からで、多くは明らかに報復の脅威があるにもかかわらず政府支持者の中心地からであった」⁶という。彼女達と支持者の女性達のこうした行動は、女性でしかも白人の女性が政治的な活動を行うことが稀だった時代背景もあり内外のマスコミの注目を集めたが、6月16日、法案の採択という結果に終わった。

このように当初の目的である法案上程の阻止には失敗し、政府も新聞各紙も彼女達の抗議は終焉を迎えたと宣言したが、7月18日には再び4人の女性が連邦庁舎で初めての「徹夜の抗議 (vigil)」を行うなど活動を継続していった。

結成当初の認識 — (白人) 女性「だからこそ・なのに」

当初の目標であった上院法採択の阻止はできなかったが、その後も活動を維持していくことを決めた彼女達は、結成から数余年の間はまずは事態を把握し、それをより多くの人に知らせることが大事だとの考えから情報提供に主眼をおいていた。そのため、ニュースレター⁷発行を活動の軸とした。また、ニュースレターの購読料はボランティアで活動していた彼女達にとって貴重な活動資金源でもあった。このニュースレターは政府の動向に関する情報を掲載することは勿論、自らの意見を表明する場でもあった。このニュースレターに当

⁵ 黒いタスキをかけるというアイディアはシンクレアーが提案した。また、マスコミを通じて一般にも広く呼称として認識されたことから1956年4月、ブルームフォンテンで開かれた総会で「ブラック・サッシュ」を正式名称にすることが決定された。なお、一回目の総会は55年11月29、30日にポートエリザベスで開催された。The Black Sash, vol.1 no.1 January 1956, p.6.

⁶ The Black Sash, vol.1 no.1 January 1956, p.6.

⁷ このニュースレター発行が機関誌SASHの前身となった。

時の彼女達の自己認識を探ってみる。

結成当初においては、上院法の上程に象徴される当時の政治に対する不満をアフリカーナーとの協力によって解決しようという姿勢が見られる。それは設立当初の方針にも表明され、1956年1月に出された初のニュースレター⁸で表明した組織としての理念、方針として次の6項目があげられていた；

1. 連盟は圧力団体であり、政治的道義の回復と奨励及び憲法に基づいた政府の保持を目指す
2. 連盟は民主主義における個人の責務について人々に自覚してもらうよう努める
3. 連盟は会員に対し政治問題について情報を提供する
4. 連盟は2つに分かれているヨーロッパ系集団 (European population) が歩み寄れるよう努める
5. 連盟は二言語集団であり、二言語主義を推奨する
6. 連盟は、自らの活動について報告を行う

4、5からは明らかにアフリカーナーを意識していることが分かる。両者間におけるコミュニケーションの断絶から回復することに取り組むべき懸案事項として捉え、両者の歩み寄りにより政治的、社会的混乱の解決は可能であるという期待を抱いていたことを窺わせる。

このように設立当初は「ヨーロッパ人」というくりのなかで両者は「我々」の範囲内にあった。逆に言えば、此の頃はまだ他の「人種」との関係については意識が希薄だったといえる。また、彼女達は、新聞に次のような呼びかけ文を掲載した；

今や、政府がこの国の女性達の声に耳を傾けるべきときがやってきました。

私たちはこれからの南アフリカ人であり、先祖達の罪の矛先をかわさねばならないであろう今の子供達を育んできた者たちです。

私たちは何もせずに我慢することはできません。現政府はいかなる抗議にも耳を傾けないと述べています。平和な南アフリカを期待する母、祖母、妻、恋人、職業婦人、若い女性として私たちは共に行動しようと団結しているところです。

女性として、政府を正気に戻そうと思っています。それ故私たちは英語系、アフリカーンス語系の全ての女性に、この行進に参加するように呼びかけます。自由 (liberty and freedom) を尊重する全ての女性達よ、この呼びかけを心に留めて行動しましょう⁹。

⁸ *The Black Sash*, vol.1 no.1 January 1956, p.1.

⁹ Michelman [1975 : 34-5]

この声明文では母、妻、働く女性など様々な「普通の」立場の女性が強調されているが、英語系の女性達のみならず、アフリカーナーの女性達にも届くことが意図されていた。少数ではあるが、既にアフリカーナーの知識人達が上院法の上程に対して異議を唱えていたために自分達の運動に参加してくれるのではないかという期待を寄せていたためだという。この点に関して創設者の一人であるジーン・シンクレアーは、ミッチェルマンとのインタビューのなかで結成時に組織の指導的立場にあった女性達は、アフリカーナーとの接触が限られていたため、この声明文から多くのアフリカーナーが政府に反対し、抗議にも参加してくれるだろうと想定していたと述べている¹⁰。

しかし、あくまで当時は彼女達にとっての「女性の範囲」が両集団を超えたものとしては捉えられていないということも言える。またアフリカーナーとの関係という点に絞って考えれば、ここでは「ヨーロッパ人コミュニティ」という範囲にさらに「女性」という範囲を重ねて両者の「我々」意識を深めようとしていることが指摘できる。

では、アフリカーナーとの関係構築という取り組みはどのような形で身を結んでいたのだろうか。1956年5月号のニュースレター *The Black Sash* ではアフリカーナーの女性幹部が他の幹部と共に紹介されている¹¹。アフリカーナー系のニーナ・ペニー (Mrs. Nina Penny) は、幹部紹介文で3人の子供の母であり、結婚前にギフトと花の店を経営していた経験を生かしヨハネスブルグの幹部のなかで財務の専門家であるという紹介がされている。このようにアフリカーナーの女性で会員になった者もいたが、問題の解決ということでは、性別に関係なくアフリカーナーとの協力関係をいかに紡ぐかが急務だった。例えば、ニュースレターに掲載される各地区、支部、及び会員からの意見・報告欄に次のような記載があった；

キンバリー支部の4月のニュースはアフリカーンス語で伝えられました。ほかの地区でも心にとめて做ってもらえればと思います。ニュースが私達の双方の豊かな言語で聞けるのはよいことです¹²。

さらにスプリングス地区の会員からはアフリカーンス語を話す男性との次のようなエピソードも寄せられている。

当地での黒バラの日 (Black Rose Day) に手伝いをしている最中、私たちの会員のひとりがパンフレットとバラを手渡したアフリカーンスを話すご年配のある男性の反応にその会員は、とても心動かされました。男性はパンフレットにじっくり目を通した後非常に興奮し、“ありがとう、ありがとう”と言うのがやっとでした。彼の驚きと感激ぶりからいかに我々アフリカーンス話者の市民が誠実な読み物を手に入れる機会がほとんどないようだということが改めて分かります。

¹⁰ Michelman [1975 : 35] ただし、インタビューの日時は不明。

¹¹ *The Black Sash*, vol.1 no.5 May 1956, p.8

¹² *The Black Sash*, vol.1 no.5 May 1956, p.10.

また、ピーターマリッツバーグ支部からの声としてブルームフォンテンでの会議報告を聞いた会員が、報告をうけて次のような感想を寄せている；

決定事項のうちの2つが、私の心に迫りました。a) ブラック・サッシュが2つの白人種間のよりよい調和を達成しようと決心した点（自宅にアフリカーナーの子供達をいさせるという提案は、非常に訴えかけてきました—略—）、b) さらに私の想像力を捉えたもうひとつの点は、我々の会員達を教育するということです。

我々ピーターマリッツバーグにいる者は、テクニカルカレッジで開かれているアフリカーンス語の授業に出るように会員に強く勧めています。文句なく会員に推奨できることだと感じているので。

もし、ブラック・サッシュが普通の女性達をより広い政治的知識へと目覚めさせることさえできて、何千人もの会員の一人ひとりが、バイリンガルとなれば、本当にこの国に奉仕できるのです¹³。

こうした発言の端々に当時、彼女達がアフリカーナーとの関係構築にいかに熱心で、意識していたかが示されている。つまり、この時期は自らをアフリカーナーと同じ基盤のヨーロッパ人コミュニティ内に属する白人であり、「妻として、母として（だからこそ）」という立場で繋がれた「女性」であるという自己認識を持っていた、より正確にはそうした認識を持ちたいと考えていたと指摘できる。

一方、この時期に外部の人々はブラック・サッシュをどのように認識していたのだろうか。彼女達の行動に関して当時、様々な反応が起きた。そのなかでもメディアに関しては次のような状況があった。英語系の新聞が女性達の抗議に対する世間の熱狂的な態度を取り上げたのに対し、アフリカーンス語の新聞は非難し、その方法や目的を侮蔑した。彼女達を馬鹿な女性達と呼び、彼女達の行動が有名な映画俳優が南アフリカに来たときに若い子達が見せるヒステリーのようなものだと呼称した¹⁴。また、ある閣僚はヨハネスブルグで行ったデモ行進に触れ、6人ずつ並んで行進したと言われていることを受けて「彼女達の腰周りがどのくらい知らないが…」と皮肉を述べている¹⁵。こうしたメディアや政治家の侮蔑的反応をミッチェルマンは、彼らが彼女達の類を見ない行動を大いに意識している証だと指摘している¹⁶。

当時このような行動をとる女性達、しかも、白人というアパルトヘイトの受益者側と受けとめられる側からの行動は国際的にも関心と呼び、メディアでも報道され、様々に注目を浴びることとなった。明確な訪問期日は不明だが、1957年10月号のニュースレター *The Black Sash* には、スイスのジュネーブで開催された「国際女性連盟 (the International

¹³ *The Black Sash*, vol.1 no.5 May 1956, p.15.

¹⁴ Rogers, Mirabel (1956), *The Black Sash: The Story of the South African Women's Defence of the Constitution League*, Johannesburg: Rotonews (PTY.) LTD, p.23.

¹⁵ エリック・ロウ (Eric Louw) 氏 (当時の財政・外交問題担当相) のこと。Rogers [1956: 23]

¹⁶ Michelman [1975: 35]

Alliance of Women)での出来事が記載されている¹⁷。会員のパワー (Mrs. Power) が参加し、ブラック・サッシュの活動紹介が熱狂を呼び起こしたとあり、同連盟の事務局長であるハルシー (Mrs. Halsey) にブラック・サッシュを迎えたことがこの会議に輝きを必ずや添えるだろうと絶賛されたことが記されている。こうしたエピソードから結成して間もなくであるにも関わらず海外にもその存在を認知され、評価を受けていたことが分かる。

このように、彼女達の行動は大きな関心を集めることとなったが、その背景として当時の「女性」に対しての認識に衝撃を与えるものだったということがある。女性が公然と政治に口を出すという行為そのものが、「良き妻、母」という価値観が強かった当時においては、異例のことだったからである。そのため、上述した自己認識と同様に「妻、母」という意味での「女性」という同じ認識枠組みではあるものの、外部からの認識においては「女なのには、妻なのには、母なのには」と自己認識の「女として、妻として、母として (だからこそ)」とは逆のベクトルで捉えられていたことが指摘できる。

60年代—疎外・孤立期

結成直後はその珍しさも手伝って多くの女性たちや社会から熱狂的に支持された側面があったが、上院法採択後は、抗議の矛先をストレイダム首相の辞任要求へと転換させて活動を続行したものの初期のような熱気を維持することは困難となっていた。そのため活動の継続、終了を含む将来の方針をめぐって議論が噴出した。活動の継続は、政府に対するより一層踏み込んだ抗議、つまり、「白人優越 (white supremacy)」との対決を射程にいれていくことを意味しただけに慎重にならざるを得なかった。

組織の方向性と組織を結成する起爆剤となった「上院法」に代わって人々の関心を引き付け続ける争点を模索する状況は、1955年11月29、30日に開かれた初の総会で、憲法を遵守していくという以上の方針を打ち出せなかったことに象徴されていた¹⁸。先に述べたニュースレター発行やデモはそうしたなかでも継続できる活動手法だったとも言え、地道な活動を続けながら向かうべき方向性を模索する時期が到来した。

50年代後半からのそうした状況は、一方で今後のブラック・サッシュの活動を特徴付ける活動への大きな布石が打たれた時期ともなった。政府による反政府抗議への弾圧が厳しさを増し、日常生活においては政府による白人、黒人などの規定集団を超えての社会接触がますます乏しくなる時期において、彼女達の活動はむしろ貴重で重要な接触の場にもなっていた。具体的には50年代後半から始まったアドヴァイス・オフィス活動が、貴重なアパルトヘイトの実態を知る情報源にもなり、アフリカ人女性を中心とする他集団との接触の場とも

¹⁷ *The Black Sash*, vol.2 no.9 October, 1957,p.1.

¹⁸ Michelman [1975 : 54]

なっていた。そして、このアドヴァイス・オフィス活動は、アパルトヘイトの被害者であるアフリカ人らを救うだけでなく、方向性を模索していた彼女達にとっても自らの活動の意義を付与してくれる言わば、自己認識の拠り所ともなっていた。

初のアドヴァイス・オフィスは1958年、ウエスタン・ケープにあるタウンシップ（アフリカ人居住区）のランガに隣接するアスロン（Athlone）に設置された。アドヴァイス・オフィスの主旨は、パス法¹⁹ 抵触により逮捕、投獄されたアフリカ人女性を援助するというものであった。はじめは保釈金の援助から始まったが²⁰ 60年代、政府による都市部へのアフリカ人の流入を規制する法律の強化と連動して、政府への抗議行動、法律上の支援、パス法の犠牲者の家族への支援など内容は多岐にわたっていった。また、支援を求める人々の増加に伴い、全国の都市部にオフィスを展開することとなった²¹。このように設立当初のニュースレター発行やデモ抗議などといったどちらかと言えば内輪での活動から少しずつ外との接触が増えていくような活動内容へと展開していった。

そもそもこうした活動の変化には、上述したような結成時の社会からの支持を維持することが困難になっていたという状況がある。それは会員数の落ち込みや、社会からの批判という形で表れた。1961年には2384人いた会員も1969年には1000人足らずにまで落ち込んだ²²。選挙権をもつ白人コミュニティへの働きかけと議会政治への抗議で改善を望んでいた姿勢は崩れ去り、かと言ってまだアフリカ人ら人種やエスニックな枠を超えた反アパルトヘイト組織とのネットワークには踏み込んでいない時期だけに居場所はなく、自らの活動や意義において疎外感、孤立感を深めていく時期であった。

結成から10年目となる1965年には機関誌SASHの5・6月号で10周年の特集が組まれているがここからそうした状況での当時の認識を探ってみる。

1955年に組織を立ち上げたオリジナル・シックスと呼ばれるうちのひとりであり、65年当時、代表を務めていたジーン・シンクレアーは機関誌のなかで10年たって自らの役割について次のように語っている：

ブラック・サッシュは当初の理念から幾分か進歩しており、今、自らに3つの主な機能があるとみている。一つ目はそれがどんなにささやかであろうともわが国における様々な人種集団間の共感と理解の架け橋を維持するのに手を貸すこと。続け様に接点で、着実にしかも無理やり法律によって無きもの

¹⁹ パス法とは1952年に制定された法律であり、正式には「バンツール（パス廃止・書類統一）法」という。国土の13パーセントに押し込められたアフリカ人は、生活のために白人居住地域に出稼ぎに行かざるをえなかった。こうした出稼ぎ者の流入を管理、規制するためにアフリカ人にパスの携行を義務付ける内容となっていた。

²⁰ 保釈金制度については、拙稿「顔の見える関係へ：CATAPAW 結成、反パス活動を通して」、『工学院大学 共通課程 研究論叢』第44-2号、2007年2月、25-37ページを参照のこと。

²¹ アスロンに続き、ヨハネスブルク、ダーバン、イーストロンドン、ポートエリザベスなど都市にオフィスが設置された。その後オフィスの設置場所は、時代ごとに多少の変化はあるものの都市部中心である。

²² Scott [1991 : 137]

にされている状況で、教会や人種関係研究所、ブラック・サッシュのような組織が、普通のレベルで個人が出会う機会を提供しており、来るべき時代には、この上なく貴重なことだったと思ってもらえるだろうと確信している。

2つ目の機能は、いくばくかアパルトヘイト政策の実施による非人間的な影響を軽減し、不運なアフリカ人が彼の生活のあらゆる側面を支配している法律の迷路から抜け出す道を見つけられるように手助けすることである。—略—

3つ目はおそらく最も重要であるが、公的な事柄における行政の暴政が着実に進んでいることを監視することである。ヒットラーが1933年から1945年の12年の間に完遂した全てを完遂できたのは、反対派の声を封じ込めることに成功したからである。このことが私が今日の南アフリカにおいて異議を唱える精神を息づかせておくことが非常に重要であると考えられる所以である²³。

これら一連の発言には、自らを「架け橋」的な存在と位置づけ、接触の場を作る努力をすること、個人の権利を護り、尊重するという人権尊重の志向性を持った活動を行っていくこと、それは会員個人の信条に支えられたものであり、それらを実行する場として位置づけていることが分かる。逆の見方をすれば、これらの自己認識は、当時、政府によるアパルトヘイト政策が進み、集団間の接触が制限され、個人、特にアフリカ人の権利が剥奪され社会の分断化が進んでいることの証でもある。それ故、役割の3つめの「政府の監視」という意味も重みを増している。

また同じ特集記事のなかで、ケープタウンの地元紙「ケープアーガス (Cape Argus)」に掲載された記事が再掲されている。その内容とはケープアーガスの12の質問に同地区の幹部を含む3人——ペギー・ロバート (Peggy Robert, 地区委員長)、ノエル・ロップ (Noel Robb, 同副委員長)、ユーラリー・ストット (Eulalie Stott, ブラック・サッシュ前代表) が答える形で掲載されたものである。質問内容は財源やメンバーシップについてなどから目的、理念に関わることまで多岐にわたっている。ここでは、その再掲記事をもとに認識に関わる質問を取り上げて考察する²⁴。

「質問1：多くの人に対してブラック・サッシュは徹夜の抗議 (protest vigils) を提案していますが、中年の女性達が街頭に立ち、不機嫌そうに見えるというのは印象的というよりお笑い種ではありませんか？」

この質問に対してまず、ロバートがそのような反応があることを認識している上で、逆にある女性の‘徹夜の抗議をしているところを通りがかる度に、感動を覚える’という発言に示されるような人々に何かを感じさせる効果も生んでおり、効果は人により様々であることを述べている。また、ロップは全ての白人が白人という名のもとに行われている悪行を支持しているわけではないということを外に向かって示すべきだと考えており、抗議活動を継続すべき、ねばならないと考える一因であると述べている。また、別の理由として多くの人がそ

²³ *The Black Sash*, vol.9 no.2 May/July, 1965, pp.1-2.

²⁴ この記事がアーガス紙の好意により機関誌 *The Black Sash*, vol.9 no.2 May/July, 1965 pp.25-27. に再掲許可された。ここではこの再掲を参照した。

のような活動をできないと思い込んでいるため、抗議活動が未だ可能であることを示す意味もあるとも述べている。一方ストットは自分達を中年と呼ぶことに対して「我々はいつまでも中年ではいられない。現に我々はもう中年ではないし、会員のなかには20代前半のものも入れば、90歳に近い会員もひとり、ふたりいる」として、様々な年代がいることを強調している。

これらの発言には自らが白人に規定されることは認識しているものの、アパルトヘイトを支持するような白人とは一線を画している自負が見られ、また、会員の構成も様々な年代がいることを強調することによって外部から思われがちであった「中年女性」の組織という認識を訂正しようという姿勢も窺える。

また、「質問4：あなた方が活動を始めて以来、白人の世論は、あなた方が提唱していることに対してますます反発しているということを認められますか？」に対してロップが、白人の世論が以前に比べて反黒人寄りになっていること、黒人の世論も反白人寄りになっていることを述べた上で次のように述べている：

それ故我々はもっと多くの白人が日々の生活のなかで非白人の方々に辛い思いをさせている不公平さというものを理解し、思いやりをもつこと、そして、彼らを理解し、共感し、肌の色に関係ない公平さに向けて活動しようとしている白人もいるのだということをより多くの非白人の方々が気づくことが重要だと考えています²⁵。

ここにも自己を規定する枠組みとして、また活動対象としても「白人」を意識していること、なかでも自分達が「良き隣人」としての白人であることの意識が出ていよう。

「質問5：幾度もの失敗という観点から全ては無駄だと時折、感じないか？」に対してはロバートが記者に対して、他の質問も含めて質問全体の傾向が自分達が行おうとしていることがうまくいっていないということを示そうとしているとして多少、憤慨しつつ次のように答えている：

仮にもし、実質的に我々が完全なる敗者だとしても自分達がやってきたことは無駄ではないでしょう。自分の信じるもののために立ち上がり、闘うことはいつだって最善なんです。もし、あなたが負けたとしてもまだましです。それとは別に、ブラック・サッシュにいることは人として自らを救っているんです。以前は決して知ることのなかったことを気づかせてくれ、自らの目的に応えようと努力することが自分達をより良い人間にさせ、より強くさせてくれる。ブラック・サッシュの女性達が行ってきた自己犠牲、共にいることを喜び合える友情…こうしたものは大半の物的基準では外されてしまうでしょうが、無駄ではありません。

これらの回答には一人の人間としての信条や成長といったものを肯定し、ブラック・サッシュはそうした肯定感を与えてくれる場であるという認識が垣間見れる。

²⁵ *The Black Sash*, vol.9 no.2 May/July, 1965 p.26.

「質問10：もし、人がこの国において政治的に物事を変えたかったら、ブラック・サッシュより政党に時間を割こうと思うではありませんか？」という質問に対してはやや異なる角度からの返答であることを断った上でストットが：

ある女性がブラック・サッシュのために活動しているからといってそれは、彼女が自分の家庭を顧みないということではないということは言っておきたいと思います。自分の余暇を庭弄りやカード遊び、果ては国民党のために活動している女性達と同様に彼女も夫や子供達のあらゆる面倒を見ていることを敢えて言っておきます。

と述べているが、上述した一人の人間としての自覚が垣間見られつつもここには当時においても妻や母としての役割を意識し、また意識せざるを得ない状況があることが見てとれよう。

次の「質問12：全てをまとめるなら、ブラック・サッシュの記録というのは多大な努力と完全なる失敗だと言っても良くはないですか？」という質問に対してはロバートが将来、いつか南アフリカにも「非白人」の人々が政府に物申せる社会がくるだろうと明確に述べた後で、次のように発言している：

しかしながら、そのような時が来たときに、この国で白人も白人でない人も共にやっていくことが正しく、また可能だということを納得し、確信している白人がいるということは、不可欠なのです。私達はブラック・サッシュが自由と公平な社会のために積極的に活動している白人が既にいると白人ではない人々に気づいてもらうような役割を担ってきたと思っています。

彼女達の発言にはブラック・サッシュの会員が白人であることを自覚し、しかし、自らは多くの白人とは異なる「自覚ある白人」、「良心的白人」とでもいうべき立場にあるという認識がみえよう。これは先のシンクレアーが述べた3つの役割のなかに見られた「架け橋」的役割という認識を支える要素でもあろう。

外部からの認識という点では活動に賛同する人々もいたであろうが、アーガス紙の質問の傾向、内容にも表れているように必ずしも好意的に見られてはおらず、ある種目障りな存在として認識されていたことが窺える。白人コミュニティ内のみならず、時代的にまだ、他の反アパルトヘイト組織とも繋がりのない時期において社会からの疎外感、孤立感を深めていたことが表出している。

結成から10年たち、アドヴァイス・オフィス活動によってアフリカ人らとの接触も増えていたこの時期、妻、母としての認識が依然として占めつつも一人の人間としての自負も見られ、また、「良心的白人」という認識を持つことで架け橋的存在とそれに基づく活動をという認識も見られるようになっている。しかし、別の言い方をすればこうした「架け橋」、彼女達自身がよく使う「中庸派 (middle ground)」というスタンスがどこにも居場所のない孤立状態を生み出す源ともなっており、ある種の悪循環に陥っていた。それを支えていたのがアドヴァイス・オフィス活動におけるアフリカ人らとの「顔の見える関係」であったと言える。

70年代—さらなる疎外・孤立と女性組織としての萌芽

1975年にアンゴラ、モザンビークが独立し、周辺国が資本主義への対抗をみせるなか、「白人、資本主義最後の砦」としての南アフリカ政府による「共産主義＝悪」というレッテル貼りが強化され、一般社会にも浸透していった。そうした周辺国の変化から1977年には国防白書で初めて「全面戦略（トータル・ストラテジー）」構想²⁶が明らかにされ、新たなアパルトヘイト体制の段階に入った。政府に異議申し立てをするような組織同士のネットワーク形成も難しく、「共産主義＝悪」のスローガンがラベリングとして使われ、社会に浸透すると、彼女達の社会からの疎外、孤立は一層厳しさを増していた。その限られた状況のなかで、彼女達はどのように自らを認識しながら活動を継続していたのだろうか。

1975年、当時代表であったシーナ・ダンカンがアメリカ政府の招きでアメリカツアーに赴き、そこでの体験から女性運動に対しての新たな洞察を得て帰国した。同年は、国際婦人年であったが、ダンカンはこの南アフリカの全ての女性の権利のために闘う政治的な連帯の手段として女性のジェンダーアイデンティティーを利用しようとする状況を生み出す機会として捉えていた²⁷。この考えは他のメンバーにも好意的に受けとめられたが、結果的にはこの試みは短命に終わった。というのも自分達と白人以外の女性達との間の溝が余りに大きく、ジェンダーアイデンティティーの共有ということだけでは乗り越えられないことに気づいたためである²⁸。また、乗り越えようとするのが自らをアイデンティティーの危機に追い込む危険が生じた。そのひとつが同年半ばにケープタウンにて白人女性による様々な団体が、国際婦人年に際してのプロジェクト設立のために会したとき、45対1でブラック・サッシュがこのプロジェクトへの参加から排除されてしまったことである。その理由はブラック・サッシュに「政治的」な志向が見られるというものであった。その後、他の女性組織との協力を試みたが真の意味での政治的な活動とはならなかった。

南アフリカでフェミニズムの視点から書かれた先駆的著作であるチェリル・ウォルカー（Cherryl Walker）の *Women and Resistance in South Africa* が80年代初めに出版されたが²⁹、この頃になって女性の連帯を考える気運が出てきたことを考えると、このエピソードに見られる試みは先駆的であったが故に受け入れる土壌が立場に関係なく育っていなかったといえる。「女性」であるということが連帯の可能性をもつには多少の時間差が必要だったのであ

²⁶ アパルトヘイト体制を維持するための国内外の戦略であり、軍事面のみならず、政治、経済、社会、心理的要因など総動員し、「共産主義」を共通の敵としていた。

²⁷ Scott [1991 : 209]

²⁸ *ibid.*

²⁹ Walker, Cherryl (1982, 1991) *Women and Resistance in South Africa*, Cape Town, Johannesburg : David Philip.

る³⁰。後年ダンカンハスコットとのインタビューのなかで「南アフリカに住む我々にとって適切なタイミングではなかった」と語っている³¹。

この一連のエピソードには、当時「女性」としての連帯を意識する気持ちが芽生えていたものの、それを梃子に連帯できるような外的環境は整っていなかったことが表れている。つまり、外部の他者認識という点においてブラック・サッシュは「女性」として連帯できる相手というよりも政治的な色づけを持ってまず、認識されるという存在であった。その政治的な色づけということが具体的にはどのようなものかは次のコンタックのメンバーからの発言に窺うことができる。

コンタックは1976年のソウェト蜂起³²直前に結成された。結成の中心となったのはアフリカーナの女性達であった。彼女達は平均的な中流階級の白人女性が他の「人種」集団と唯一触れ合う関係が「マダムとメイド」を基盤としたものしかないことに以前から気づき、様々な「人種」の女性達が定期的に顔を合わせられるよう、そしてそれによって互いの垣根を壊すようそれまで尽力していた。こうした姿勢はブラック・サッシュの活動姿勢に重なる。結成した時代こそ違え、この様にいわば似たような「志」を持って活動を始めた彼女達ではあるが、ブラック・サッシュ（の会員）をどのように認識していたのだろうか。

かつてブラック・サッシュの会員であり、イーストロンドンでのコンタック結成の設立メンバーの一人であるマリエティエ・マイバー（Marietjie Myburgh）によれば、70年代半ばの時点でブラック・サッシュに対しては行進やポスターを掲げてスタンドを行うなど「戦闘的」との認識をもっていたという。当時、ケープタウンではコンタックはカラードとの繋がりを持つことへは力を注いでいるが、アフリカ人達を無視する傾向があるという見方があった。それでも、人口のやや少ない保守的な傾向のある町では、コンタックは「リベラル」だとみなされ、嫌がらせに悩まされたりもした。こうした経験を持つコンタックの人々さえもブラック・サッシュを過激な活動家の組織と見なしていた。

こうした見方の背景についてマイバーは、互いの組織、会員が基盤とするコミュニティ

³⁰ 後に再度「女性」としての連帯の可能性を探った試みとしては拙稿「80年代反アパルトヘイト運動におけるミッシングリンク：『女性』というくくりがもたらしたもの——『ブラック・サッシュ』の経験から——」、2002年3月発行『アジア・アフリカ研究』41巻3号（アジア・アフリカ研究所 発行）、44－61ページを参照のこと。

³¹ Scott [1991 : 210]

³² 1976年に政府は中学、高校での教育言語にアフリカーンスを強制導入しようとした。これに対して、1972年に結成されていたアフリカ人高校生による「南アフリカ学生運動（SASM）」は、当組織の地域委員会委員とソウェトの各高校からの2人の代表から構成される「ソウェト学生代表評議会（SSRC）」を結成して対応しようとした。SSRCは6月16日を平和デモの日と決め、呼びかけに応じた学生2万人弱がデモに参加したが、これに警官が出動し丸腰の学生に発砲して多くの死傷者が出た。騒動は拡大し、一般市民をも巻き込み、また全国各地での警官隊との衝突など10日間で140人が死亡、1000人が死傷するという惨事になった。反アパルトヘイト運動の転換点とも言われるこの事件は国際的にも知られることとなり、南アフリカ政府への批判の高まる一因ともなった。

(アフリカーナー、英語系)間でのコミュニケーションが欠けていることに起因するのではとみていた。マイバーの友人のなかでもブラック・サッシュがどういった活動をしているのかを知っている人はほとんどおらず、他と比べてもアフリカーナーのブラック・サッシュに対する偏見の色はより強いとも述べている³³。例えば、ブラック・サッシュを過激な活動家達であり、特に、共産主義の活動家、組織であって自分達が参加するようなものではないと認識していたという³⁴。マイバーの友人の一人はブラック・サッシュは非合法化されているとさえ思い込んでいたという³⁵。その他の人もせいぜい、プラカードをもって立っている、行進している女性というくらいの印象しかもっていなかった上、地元イーストロンドンでのアドヴァイス・オフィス活動を知っている者はほとんどいなかった。

また、50年代以降政府の「共産主義」への弾圧に象徴されるように社会全体が政府により「共産主義」への恐怖感を意図的に煽られるなか、政府の説く「共産主義＝悪」というレッテルが作用し、ブラック・サッシュ自身は共産主義や共産主義を信望する組織にむしろ距離を置いていたにも関わらず、ブラック・サッシュに対しても「良く分からないものに対する恐怖感＝共産主義への嫌悪感」という形で表出していたということが指摘できよう。先に述べた、ブラック・サッシュに対する「政治的な色づけ」とはこれらのことを意味していた。
(次号へつづく)

(かみくぼ かずよ 本学非常勤講師)

³³ Spink, Kathryn (1991) *Black Sash: The Beginning of a Bridge in South Africa*, London: Methuen. P.243

³⁴ ブラック・サッシュが組織全体としてはむしろ共産主義に対して距離をもって見ていたが、もし、会員のなかにそうした思想志向を持つものがいた場合、それだけで組織として排除するような傾向はなかったといえる。ただし、本部による統制というよりも地域ごとに実状に合わせて活動を任せていた傾向から、80年代になるとダーバンを中心とするナタール地区ではマルクス主義的なフェミニストの会員や志向が見られたりはした。こうしたことから時代や地域によって共産主義の受けとめ方には多少の違いはあったといえる。

³⁵ 実際に非合法化されたことは設立以後今日まで一度もない。